

ブリッジザギャップ  
株式会社 BRIDGE the gap

すきむらんど村長

いけだ こうしろう

池田 幸士郎 さん (47 歳)

須木地区のレジャー施設「すきむらんど」は、「遊ぶ。食べる。ととのう。」をコンセプトに、昨年7月にリニューアル。今年5月には芝生広場が完成し、フードトラックも導入するなど、整備が進んでいる。昨年5月に愛知県から家族で小林市にUターンし、今年4月にすきむらんど村長に就任した池田さんに話を聞いた。

## たくさんの人に楽しんでもらえる地域へ

「県外・海外の方がこのエリアに興味を持つような仕組みづくりをしていきたい」と話すのは、須木地区のレジャー施設「すきむらんど」の村長池田幸士郎さん。

池田さんは、昨年5月に愛知県からUターンし、今年4月からすきむらんど村長に就任。施設の管理運営や市役所などとの連携に加え、イベントの企画なども担っている。

今年に入って芝生広場が完成し、フードトラックも導入するなど、整備が進むすきむらんど。

「地域の人の理解も得ながら、引き継がれてきた部分に新しいことも上手く取り入れていけるよう模索中」と池田さん。「『トンネルを抜けると里山が広がっている』というイメージを、もっと演出していきたい」とも話す。

そんな池田さんが現在注目するのが、昨年9月に須

木地区も含む形でエリアが拡大した「霧島ジオパーク」。関係団体などと連携し、関連する商品開発にも取り組んでいる。

「外国人観光客のなかには、東京などの大都市圏とは違う日本を見たいと思っている人が多い」と池田さん。「神話や火山の営みから生み出されるジオを活用して『霧島』というブランドを確立できれば、必ず宮崎と鹿児島をあわせた南九州でのアドベンチャーリズム（※）が成り立つ」と意気込む。

その他にも、市民団体の代表として本市初のクラフトビール「KOBAYASHI ni Ale」の開発・発売の中心となるなど、精力的に活動する池田さん。

「たくさんの人に来てもらせる仕組みをつくって、楽しんでもらえる地域にしたい」と話す池田さんの挑戦は続く。

※アクティビティ、自然、文化体験の3要素のうち、2つ以上で構成される旅行のこと

すきむらんど吊り橋から見る「ままこ滝」。約34万年前に加久藤カルデラから噴出した火砕流溶結部にかかる滝で、ジオパークの見所のひとつ



すきゆずと小林湧水を使ったクラフトビールとして話題を呼んだ「KOBAYASHI ni Ale」。「地域が元気になる起爆剤のひとつになれば」と池田さん



# 林 小人

こばやしびと  
Vol.117